
異世界旅行会社

芝山 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界旅行会社

【Nコード】

N4564Y

【作者名】

芝山 玲

【あらすじ】

企画競作 お題『ドアノブ』——で考えたのにこうなりました。

フィクションの世界にしか存在しなかった『異世界トリップ』

は能力者の出現により、誰にでも可能になった。ただしチート能力は付きません。旅行気分で異世界へ。

（前書き）

企画競作 お題『ドアノブ』——で考えたのにこうなりました。
タグ詐欺みたいなものです。

「彼が今回の担当者です」

「どうも」

顔を正面に向けたまま首を突き出すようにして不格好なおじぎらしきものをしたのは、いつて高校生だろう、という背は高いけれどもまだ幼さの残る顔をした少年だった。

異世界トリップ、という言葉が現実の物になったのは前世紀だと聞いている。

ある日突然自分が勇者として召還される、王の花嫁として召還される、意味もなく召還される、っていうか召還されてないのに落っこちたように出現する、などなど。主人公は突出した能力を持ち、権力者や支配者、それに準ずる異性たちに好意を寄せられ幸せな生活を手に入れる夢物語。

夢物語だ。自分の置かれた現状に納得できず、こんなはずじゃない、もつと自分に相応しい場所があるはずだ、と求め望む者が描く空想の世界。

そんな世界はどこにもない。

ないからこそ人は自らを磨く努力もするし、思うに任せぬ世の中に妥協をしながら生きていく。

決まった枠の中でしか生きていけない。それがルールだ。ルールだった。

特異な能力を持って生まれた、と言っているのかどうか、それは誰にも分からない。生まれながらにして持ち得た才能、と言ってしまったら、持たざる者はまたそれをうらやみ妬む。けれど他にどう説明をしてよいものか誰も知らないから、そう言わざるを得ない。

最初の一人は自分で好き勝手に『越える旅』をしていたらしい。

なぜそれがわかったのか、というと彼の手記が書籍として出版され世界中で大ベストセラーとなったからだ。

言葉が通じずに苦労をしたことや、食事や水が合わなくてそのたびに自宅——もともと自分のいたこちらの世界——に帰っていたので向こうの世界でも、頻繁に姿を消すあやしい奴と不審がられていたことや、ヒューマノイドタイプの生命体に出会うことができなかった世界では危うく殺されかけたことなどがあつたらしい。つまり異世界とひと言ってもそれは一種類あるいは一カ所ではなく、しかも彼は自分の意思で行き来が可能だったのだ。

彼は試行錯誤の後、自分ばかりでなく他者を連れて世界を越えること、他者のみに世界を越えさせることができることも発見する。それと同時に、この能力を持っているのが自分だけではないことも発見した。

その彼が立ち上げたのが『次元超越者組合 Dimension Over - er Organization』略して『DOOR』だ。

彼は自分と同じ能力者を集め、出版物によってその能力を世界に知らしめ、現実逃避のできる旅行会社を作ってしまったのだった。

完全に異世界へと移住をしてしまう永住型異世界トリップと、数日間から数ヶ月の滞在を楽しむプチ異世界トリップは瞬く間に人気となった。

それから数百年。『DOOR』はいまや世界規模の会社となり、海外旅行よりもプチ異世界トリップが休暇の主流だ。

越えるやり方は能力者によって千差万別だそうだ。特別詠えの銀のナイフを両手に持って踊るように空間を切り裂いて穴を開けるパフォーマータイプの者もいれば、部屋のだ真ん中にホームセンターなどで売っているドアだけをたてておいて『どこ。もドアー!』と言いながらそのドアを開ける者もいるという。

俺の担当だという少年は手で開けると言った。

「なんていうか、こう、裂け目みたいなのがあるんです。それを両手で左右にこじ開ける感じ」

声変わりは終わったようで、容姿に似合わぬ低い声がぼそぼそと言った。

「選べる、のかな？」

「はい？」

俺の問いに彼は首を傾げた。そんな仕草もまた子供っぽい。

本当にこんな子供に任せて大丈夫なのだろうか、と心配になる。

「その、できれば言葉が通じる世界の方がありがたい。永住希望だけれど、もし合わなかった場合には別の世界に行きたいので、帰る方法もあった方が嬉しい。それから――」

「ご心配なく」

如才なく答えたのは少年ではなく少年を連れてきた『DOOR』のマネージャーだった。

細かい字の羅列で黒く見える紙を渡してくる。

「こちらが約款となっております。お客様が仰るのはこちらの『契約解除後の帰路確保』になります。代金はお客様のご負担になりますが、出発地へ戻ってくることはこのように確約しております。それからこちらの担当者は、見た目こそ若いですがキャリアは八年。

移動先の言語と風土は選べる能力者ですのでご心配には及びません」

貼り付けたような業務用の笑顔ですらすらとまぐし立てられ、疑念を挟む余地もなかった。

「ああ、じゃあ……お願いします」

契約書にサインをし、代金を支払う。

何年も悩んだ末に決めた異世界への移住だ。こんなところで怖し気づいてはまたいままでの繰り返しだ。ここまで来たらもう開き直って行くしかない。

「荷物は、これだけですか？」

足下に置いていたトランクを指さし、少年が聞く。

「ああ」

どうせ通貨が違うんだから財布を持っていったって仕方がない。現地で換金できるような物を持っていた方が便利だ、とは聞くが、どんな世界に行くのかわからないからそんな準備もできない。

着替えが少しと非常用食料くらいでいいだろう、と考えたらトランク一つに収まった。

「じゃあ、いきます」

少年は目を閉じると、手の甲を合わせてまっすぐ前に伸ばした。空中で指先をぐにぐにと動かしたかと思うと、ずるり、と手首までが何かに飲み込まれたように消えて見えた。

隙間が現れる。

足を開いて踏ん張った少年は、電気の来ていない自動ドアを開けるように『そこ』をじわじわと広げると、掌を使ってドアの形に成形してしまった。

「どうぞ」

ドアの前に立ち、中を覗き込む。

顔に吹き付けてきた風はこちらよりもやや冷たい気がした。

「町はずれに開いたので、人目に付くことは無いと思います。最初に足を着けたところを覚えておいてください」

「え？ なんのために？」

「そこが万が一のときの帰りのドアを開く場所になるので」

怪訝な顔をした俺のためにマネージャーが後を引き取るように詳しく説明をする。

「お客様は永住ご希望ですが、こちらへ帰りたくなる事態が発生しないとも限りません。お客様が異世界の地を初めて踏んだ場所が空間を越える扉を開くポイントになりますので、まずはそこへ立っていただき、今回担当になりましたこちらの者を呼んでいただくことになります」

「呼ぶだけ？」

通信機などがあるわけではなく単純に声に出して呼ぶだけでいい

のだろうか、と不安になったが、マネージャーは完璧な笑顔を崩さない。

「はい。ポイントに立っていただければそれだけで回路が開きますから大丈夫です」

「そっか。じゃあ」

俺は荷物を抱えると、慎重にドアの先に足を降ろした。

砂地だ。これは印を付けるにしてもやっかいだ。

「あ、忘れてた。君の名前」

名前を呼べと言うのなら、少年の名を知っていなければ話にならない。

ドアを閉じる準備をしていた少年は言った。

「『DOOR』のノブです」

はにかんだような少年の笑顔を最後に、ドアが細い光の筋になり、それも空気に溶けるように消えた。

「ドアのノブねえ……」

ベタすぎる、と思った俺の耳に少年の声が響いた。

『初めてのお客さんは必ずトリップ直後について僕の名前を呼ぶそうなんですけど、お客さんもそうですか？ それとも帰りますか？』

「ああ、違う！ まだ帰らない！ ごめんな！」

やはりこの名前は全員ひっかかるんだな、とおかしく思いながら俺は誰もいない空間に向かって謝ると、街の中心部を目指して歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4564y/>

異世界旅行会社

2011年11月13日03時21分発行